新しい学習観、教育観の提案
―西口光一編著―
『文化と歴史の中の学習と学習者 日本語教育における社会文化的パースペクティブ』

松本　明香

要　旨

本書では学習、教育、発達について新たな視点を提供する社会文化的アプローチの下で、10 人の執筆担当者が各章においてそれぞれの関心領域からの研究を紹介している。各章では、従来の学習観や教育観の問題点の指摘、本アプローチに基づいた人間を主体とする新しい学習観や教育観の提起がなされている。また巻末には、執筆担当者らによる、このアプローチから日本語教育を変えうる可能性と新たな課題について議論した座談会の様子が文字化されて記載されている。

【キーワード】社会文化的アプローチ、　相互行為、　新しい学習観、　ヴィゴツキー理論

1. 本書の概要

本書は、今後社会文化的アプローチを基盤として教育や研究に取り組みたいという読者にとって、指南書となると思われる。

本書は関西における言語学習・発達についての研究者グループが手がけた、新しい学習観、教育観を日本語(外国語)教育の世界に提起するものである。筆者を含め、言語教育、あるいは言語学習の研究に携わる者の多くが現場において何をどう教えるべきか、実際にそこで何が起きているのか、学習者達に何が学ばれたのか、教師はいずれの点に配慮して授業に向き合うべきなのか、日々葛藤を感じていることだろう。本書はそういった読者に、近年注目されている「社会文化的アプローチ」を紹介するものであり、教育現場で起こってはいるものの、従来の研究では取り上げられなかった様々な事象に焦点をあて、このアプローチから接近する方法を提案するものである。「社会文化的アプローチ」とは本書の「はじめに」において「いわゆる知識や技能の習得を含めた人間主体の行為や変容を、具体的な文脈の中で、歴史的に捉えようとする見方や接近法(p.2)」、「主体による文脈の構成ということを通して、社会的な実践や実践のコミュニティの変革という現象も視野に入れた新しい分析の視点(p.2)」と説明されている。これは従来の認知心理学に基づいて「人間を一つの情報処理機構と見る(p.1)」のではなく、具体的な実践や文化に関わる人間を主体と考えた上で、「学び」をその人間と周囲の人間や環境(言語を含む)との相互行為の営みと捉えるものと言えるだろう。

本書ではこの社会文化的アプローチという新しい視座を持った 10 人の執筆担当者が、11 章に亘って各々の研究対象についての議論を展開させる。そして巻末には「社会文化的アプローチは日本語教育を変えるか」というテーマで執筆担当者らによる討論の様子が文字化されて掲載されている。執筆担当者達が各章の執筆で貫いた信念、また彼らの現行の日本語教育に寄せる思いが生きた「声」として読み取れるであろう。

本書は全体が 3 部構成となっている。第一部「見直す」では言語教育・研究の骨格をなす概念である「学習」、「伝達能力」、「異言語話者接触」についての再考が行われている。第二部「理解する」は言語学習や言語教育場面で起こりうる事象について個々に取り上げ、社会文化的視点からの「理解」を促す。第三部「研究する」では、執筆担当者らによる、社会文化的アプローチに基づいた実践的な研究が紹介されている。各章の中には執筆担当者独自の研究によるデータや分析が示されているものもあるので、説得力があり、読者は当アプローチが幅広く研究に利用可能であることが実感できるであろう。

2. 各章の内容

第1章山下論文「学習を見直す」では、まず従来の学習観の問題点を指摘した上で、これとは異なる観点を持つヴィゴツキーの発達研究を概観する。そしてヴィゴツキー理論を背景とする、「学習」とは「相互行為を通して実現される関係性の変化」と捉える考え方を紹介している。この考えは、学習者を周りの人や人工物の関係がどのように変化するか、活動全体の中で個人が果たす役割や位置がどのように変化するかという「参加メタファー(Sfard 1998)」から学習を捉え直そうとするもので、こうした考えに基づいた具体的な研究対象としての「スキャフォールディング」や「専有」の概念、さらに実践共同体の中での学習の文脈の捉え方が述べられている。

第2章西口論文「異言語話者接触を見直す」では、最初に一般的な他者理解についての議論がある。この他者理解とは、論理空間を共有する者たちの間で、聞き手は「私の世界」に留まるのではなく、「私」が「私と異なる視点」である話し手の視点に入り込んで「眺める」ことであるという。この議論に続いて、対象言語話者(母語話者)が異言語話者(第二言語習得研究で言われる非母語話者)を理解することは不可能かについての検討、また異言語話者を理解するということの本質についての議論の展開がある。ここでは、異言語話者となる現代における日本語学習者は、全く文明が発達していないようなところから来た人ではなく、物質的な環境において現代日本と類似した環境から来た人々と想定される。それゆえ、現代の異言語話者とは、対象言語話者と共有の空間をもった者なのだとする。彼らを理解することは難しいかもしれないが、理解不可能なのではなく、「最初から手持ちの論理空間で理解可能なもの」とする。更に異言語話者接触において対象言語話者はどのような言語行為をもって異言語話者を理解しようとしているのかを独自のデータを用いて論証している。ここでは事態の(再)構成と事態の成立という二重構造をもって異言語話者と対象言語話者の切り結びが行われていることが見出されている。

第3章義永論文「伝達能力を見直す」では、従来のコミュニカティブ・アプローチで支持されてきた伝達能力を再検討し、社会文化的観点から相互行為能力を見る研究者らの新しい視点が教育に与える有益な視座を提示している。本章では「伝達能力」を「伝達」と「能力」の二つの要素に分解した上で捉え直すことを試みる。そこで顕在化したのは、これまでコミュニケーション理論で述べられてきた、コミュニケーションとはメッセージのコード化とコード解読によって達成するものと考えるコードモデルに対する問題点、また従来の能力観に対する問題点である。前者のコードモデルに対する反証として意味交渉場面の例を挙げ、参与者全てが協力し合って意味構築に関わる様相を明らかにしている。また後者の能力観については、能力とは個別的なものか包括的なものか、個人に属するか協働で達成されるものなのかについて検討する。さらに能力の発達とは、先述の「参加メタファー」の概念を踏まえて、「具体的な場面で何かができるようになること」とする考え方を挙げている。最終部分では従来の伝達能力に代わる相互行為能力を掲げ、この能力が教育実践に与える示唆を検討している。

第4章永見論文「協働学習を理解する」は、他者との活動における協働学習に着目している。ここでは「協働」ということばを「2 人以上の成員(参加者)によって活動(その単位である行為)を共にすること」と定義する。また協働学習という考えは、学習を他者、人工物の存在する社会的な場での相互行為の中で捉えようとする社会構成主義の見方によると説明する。本章では学習における「他者の存在」の重要性が一貫して述べられている。そしてこの他者との活動中の一つの形であるスキャフォールディング－子どもや初心者が、援助がなくてはできない問題を解決したり、タスクを実行したり、目標を達成したりすることを可能にする援助(p.85)－を発達心理学の領域から紹介した。さらに第二言語学習研究の領域からも先行研究を挙げ、スキャフォールディングによって言語形式の学習や発達が進んでいる実証例を紹介する。最後にコンピューターを利用する協働学習の将来的展望を示唆している。

第5章西野論文「教室での母語使用を理解する」は、教育場面で価値が評価されにくい教室内での学習者の母語使用について、その本質を明らかにすることを試みる理論研究である。まず従来の研究では母語使用とは第二言語能力の不足を補うもので、その結果、母語使用が学習者の第二言語能力の不足を表す指標として否定的に解釈されてきたことについて、西野は問題性を指摘する。続けて第二言語発達研究において、母語使用は注目に値しない行為なの

かと問題提起をし、社会文化的アプローチの観点から母語使用と第二言語発達の関係性を探る。そのために社会文化的アプローチの視点から行われた第二言語学習の対話場面で起こる母語使用の観察と解釈に関する研究を紹介し、媒介道具としての母語の働きを示す。さらに母語使用の社会認知的機能として1)スキャフォールド的援助の構築、2)間主観性の確立、3)プライベートスピーチの使用の3つを挙げ、学習者にとって母語が社会認知的空間を創るために有意な存在であること、われわれは母語使用という事象を第二言語発達と切り離して考えてはならないことを論じている。

第6章山下論文「授業の中の相互行為を理解する」は、授業内で展開する参加者間の相互行為に関する研究を紹介するものである。まず研究の歴史的経緯を説明する。続けて「制度的である」という特徴を持つがゆえに「授業らしい」とされる授業の中での相互行為について、これまでどのような観点から授業の中の相互行為が検証されてきたかを説明している。山下はこうした相互行為の分析の研究は多く行われてきたが、授業の中の相互行為と学習、発達の関係を捉えた研究が不足している点を指摘する。最後に今後の授業研究では、相互行為と学習をそれぞれ別個のものと見るのではなく、学習者が環境やリソースの制約を受けながらも能動的にそれらを利用し、相互行為への関わり方を変化させていく過程を捉えることが求められていると述べる。

第7章藤原論文「社会文化の接面に立つ学習者を理解する」では、中間言語語用論において注目されてきた語用論的転移に着目している。藤原はこの研究領域から第二言語学習者の行為の主体性、能動性について言及し、語用論的転移を誤用と捉えることの再考の必要性を主張する。従来の研究では、中間言語が「第二言語学習者が目標言語に到達する途上で構築する暫定的な文法」として、その最終ゴールは目標言語の体系に置かれていた。そしてそこには母語話者規範主義が存在し、学習者は限定された能力を持つ者、「欠陥ある伝達者(Firth & Wagner 1997)と考えられてきた。本章では、こういった学習者の発話行為を評価する際の基準として母語話者の様式を位置づけることに疑問を呈している。学習者の言語行動は語用論的転移だけでは説明できない。それは転移というよりむしろ目標言語話者の様式に近づく傾向としてのアコモデーションであると主張している。

第8章伊藤論文「第二言語学習と人格形成を研究する」では、第二言語習得研究における言語と人格形成について、ヴィゴツキーに代表されるロシア心理学を踏まえて議論している。キーワードである「人格」、「意味」、「意義」の解説をし、さらに言語に人間の心理を形成する機能を見出す所以を示している。そこでは「意味」と「意義」の相違を示し、中でも人格形成の単位としての「意味」に焦点を当てる。意味の使用は個人のアイデンティティ形成と発達過程を研究する上で重要であり、主観性を持つものである。そしてその特性としての三つの概念、(1)意味の優越と縮小、(2)意味内容の拡大、(3)時空の超越を挙げている。本書のテーマである社会文化的アプローチはこのヴィゴツキーらの発達観が発展したものだが、そこでは往々にして難解な概念が示される。本章ではそれらを伊藤自身の教育場面での実践例を交えて議論しているため、読者の理解が促進される。

第9章羅論文「学習者のモチベーションを研究する」では、学習者のモチベーション(学習動機)が議論されている。本章では羅自身による、日本語学習者の学習動機の縦断的な実践的調査の結果が報告されている。まず従来の研究が「学習動機を個人あるいは社会のいずれかに属するものとしている」、「学習動機を動的なものと捉えていない」、また「学習者の視点に立った研究がなされていない」ものであるとの問題点を指摘し、新たに学習動機を捉え直すための「社会的文脈」、「他者の存在」、「自己形成」の3つの視点を挙げている。続けてこれらを研究するための手法としてライフストーリー・インタビューを提示する。さらに羅自身の研究の報告において、外国語学習者の学習動機が固定的、不変的でない点を指摘し、さらに学習動機とは個人と社会的文脈との相互作用によって生じるものであるため、個人的なもの、社会的なものどちらかに帰するものではないことを実証している。

第10章菊岡論文「教室コミュニティの歴史と言葉を研究する」は、教室を共通の関心を持った人々が作るコミュニティと捉えた上で、そこでやり取りされる言葉について言及しているもので、菊岡自身の実証研究に基づいている。本章では特に目標言語としてやり取りされ、身につけていく言葉であるfavorite phrase を分析対象としている。favorite

phrase とは当該の教室コミュニティで記号的リソースとして活用され、状況に合わせて(再)構築される歴史性を担った、その教室コミュニティ特有の「お決まりのパターン」と説明される。本章では favorite phrase が教室の中で出現し、使いまわされ、意味づけられる様子が描かれている。その中で favorite phrase がコミュニティのメンバー間での共感促進、さらには教室活動に積極的に入れない学習者への参加促進の機能があることを明らかにしている。最後に favorite phrase が favorite である点、つまり学習者自身がそれを選び取り、好んで使いまわしている点に言及し、こうした学習者の教室コミュニティにおける貢献とことばの生成を捉えることの重要性を指摘する。

第 11 章嶋津論文「異言語話者のナラティブを研究する」は、独自の研究データを用いて、異言語話者(日本語非母語話者)間のナラティブを社会文化的アプローチの視座から分析する実証研究である。本章において注目すべきは、語り手側のみのナラティブの分析という従来の研究方法と異なり、聞き手側のナラティブ構築への積極的な関わりも分析の対象として含んでいる点である。本章ではナラティブにおいて「語られる世界」と「語る世界」の結節点として直接引用という評価装置を用いる。そして聞き手側の直接引用の使用、またそれを通して双方がナラティブ解釈を共有し、さらに共有しているという了解を互いに示し合っていることに注目する。ここから、語り手・聞き手の両者が協働してナラティブ構築を行っている様相がうかがえる。最後に異言語話者間の第二言語でのナラティブということを踏まえ、会話の参加者の社会歴史的な背景を明らかにすべきだということ、日本語母語話者がナラティブで用いる言語リソースとの比較、関連の考察も必要とされることを今後の課題として述べている。

3. 終わりに

本書全体の「はじめに」の部分で、いずれの章から読み進めてよいものであることが書かれているが、筆者の個人的な意見では第 1 章「学習を見直す」の内容が全体の章に関わるため、この章から着手したほうがいいと思われる。後の章を読み進めるうち、この第 1 章のみならず、各章における記述や主張が網の目のように関連し合って本書全体が作り上げられていることが感じられてくるだろう。

また本書の各章の参考文献には、Firth & Wagner(1997)、Sfard(1998)、Ohta(2001)といった文献が繰り返し記載されている。本書をきっかけにして社会文化的アプローチを基にした研究を進める場合、外すことのできない資料となると思われる。これらの資料を手がかりとして、社会文化的アプローチに基づいた研究を各々の関心分野へと広げる、あるいは深めていくことができるだろう。本書はわれわれ読者に言語学習・発達研究の終着点を示すものではなく、これまでなかった新たな視点からの研究の方向性を示す道標となるものである。

最後に、筆者はこの本は決して言語教育、研究に関係する立場の人だけを対象とするのではなく、人間とは何か、他者と関わる、他者を理解するとはどういうことか、人間が学ぶとはどのような様相を見せるものなのかを考えさせるあらゆる立場の人に関わるものだと思われる。また、現代日本の複雑な多文化社会に生きる人々に、こうしたことを考える必要性を大いに感じさせてくれるものである。

参考文献

Firth, A & Wagner, J. (1997) On discourse, communication, and (some) fundamental concepts in SLA research, *The Modern Language Journal*, 81 (3), 285-300.

Ohta, A. S. (2001) *Second Language acquisition process in the classroom: learning Japanese*, Mahwah. New Jersey: Lawrence Erlbaum.

Sfard, A. (1998) On two metaphors for learning and the danger of choosing just one, *Educational Researcher*, 27, 4-13.

まつもと　はるか／東京立正短期大学

thc-matsumoto@world.odn.ne.jp